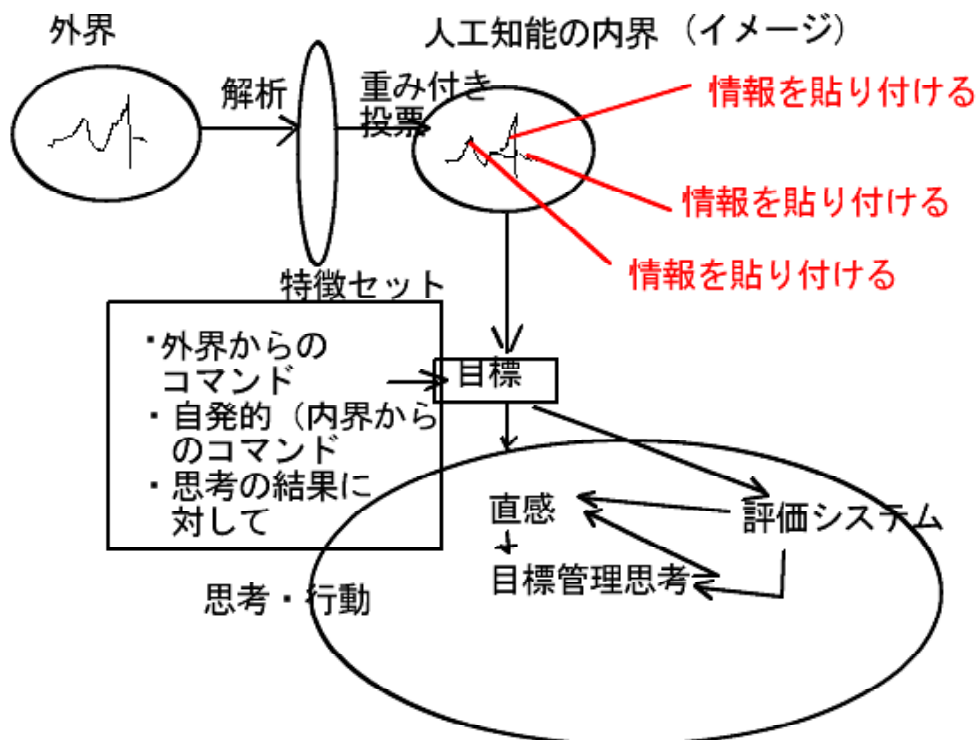


人工知能の大まかな機構について考えていって見たいと思います。

人工知能の基本スキーマ



知識を蓄え、利用していくプログラムを作ると、必然的にマップとかグラフ、コマンド、(key,value)セットというデータ表現(コンセプト)とその間の連想関係というものが定式化されていきます。そうして、基盤となるのは外界を解析し、過去のどんな知識の要素と一致したかを示すイメージとイメージに貼り付けられた情報群です。その様子は座標系に様々な情報を乗せる多様体の考え方に近いので、私は多様体法と呼んでいます。多様体にはベクトル場とバンドルとかが付随しまうが、多様大砲ではデータ群・・・つまりコンセプトです。

画像や音声、文字といったものは、解析が行われ、特徴パターン列により、第一に把握されます。これを知識と照合し、知識要素の何であるかは重み付き投票によって行われ、曖昧性が除去されイメージとなります。そうして、イメージには関連知識が貼り付けられたコンセプトが貼り付けられます。ここまでが認知処理です。

思考・行動は目標管理思考と直感(それと直感の連鎖であるシミュレーション)で実現されていきます。直感はイメージに貼り付けられているグラフとかマップを伝って、情報

であるコンセプトのコマンドを実行します。または、コンセプトセットを全件検索します。類推は、全件検索のなかで行われます。部分的にマッチするオントロジーの構成で検索に引っかかったコンセプトのなかで、まだ欠けてマッチしていない部分を元のコンセプトの持っている情報で埋める作業です。類推は直感に含まれる機構です。

学習は重み付き投票の重みとか、コンセプトの生成、コンセプト間の連想関係の構築です。解析プロセスは学習されません。生得的です。また、評価プロセスも評価オントロジーの基本は生得的ですが、学習によって疑似オントロジーも作られます。そうして、評価対象群と評価オントロジーの関係（連想関係）も学習によって作成されていくものです。

おわり